

339

1000

伊香保案内記

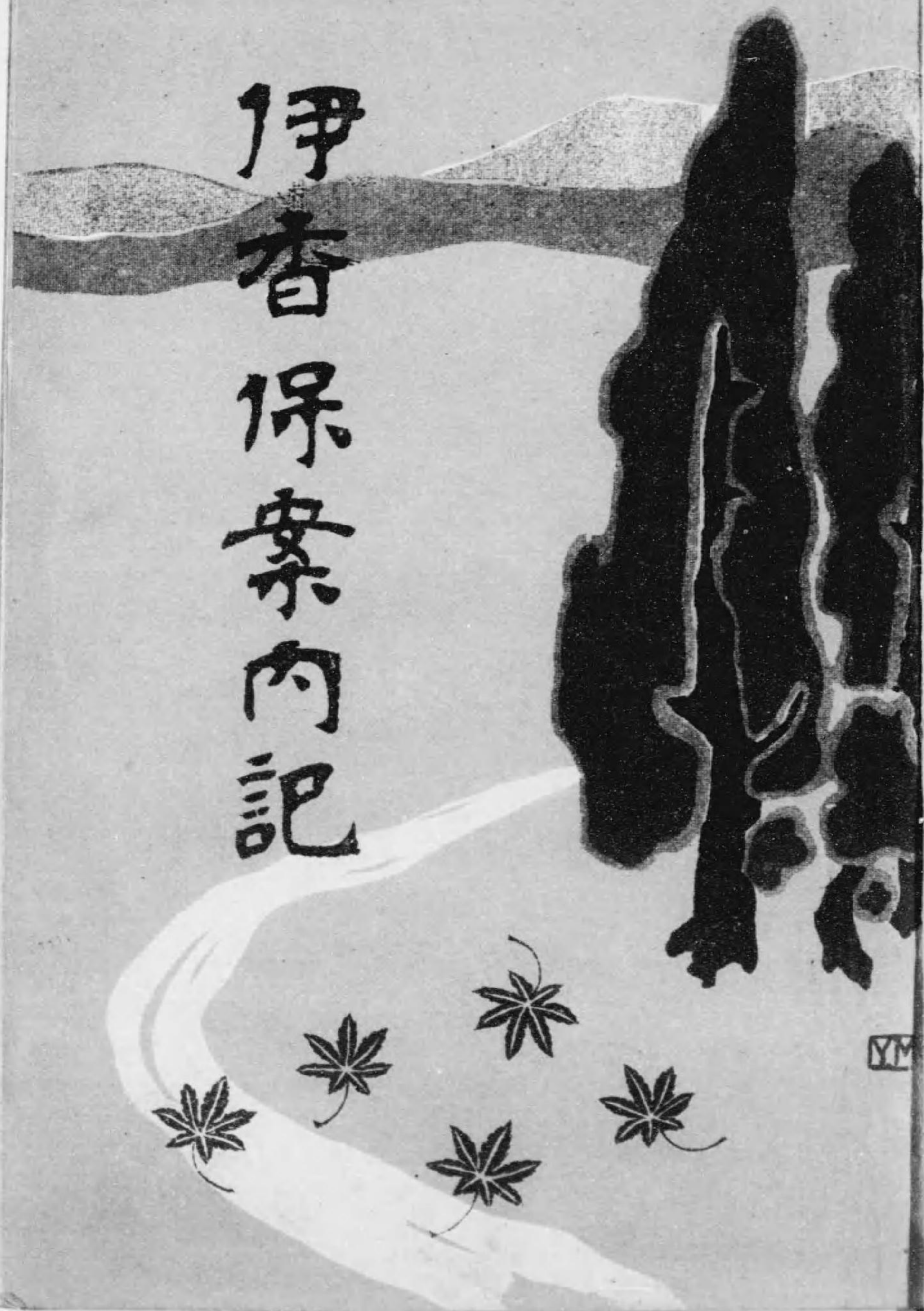


始





伊香保案内記



YM



339-1000



伊香保温泉元

鑛 榮 館

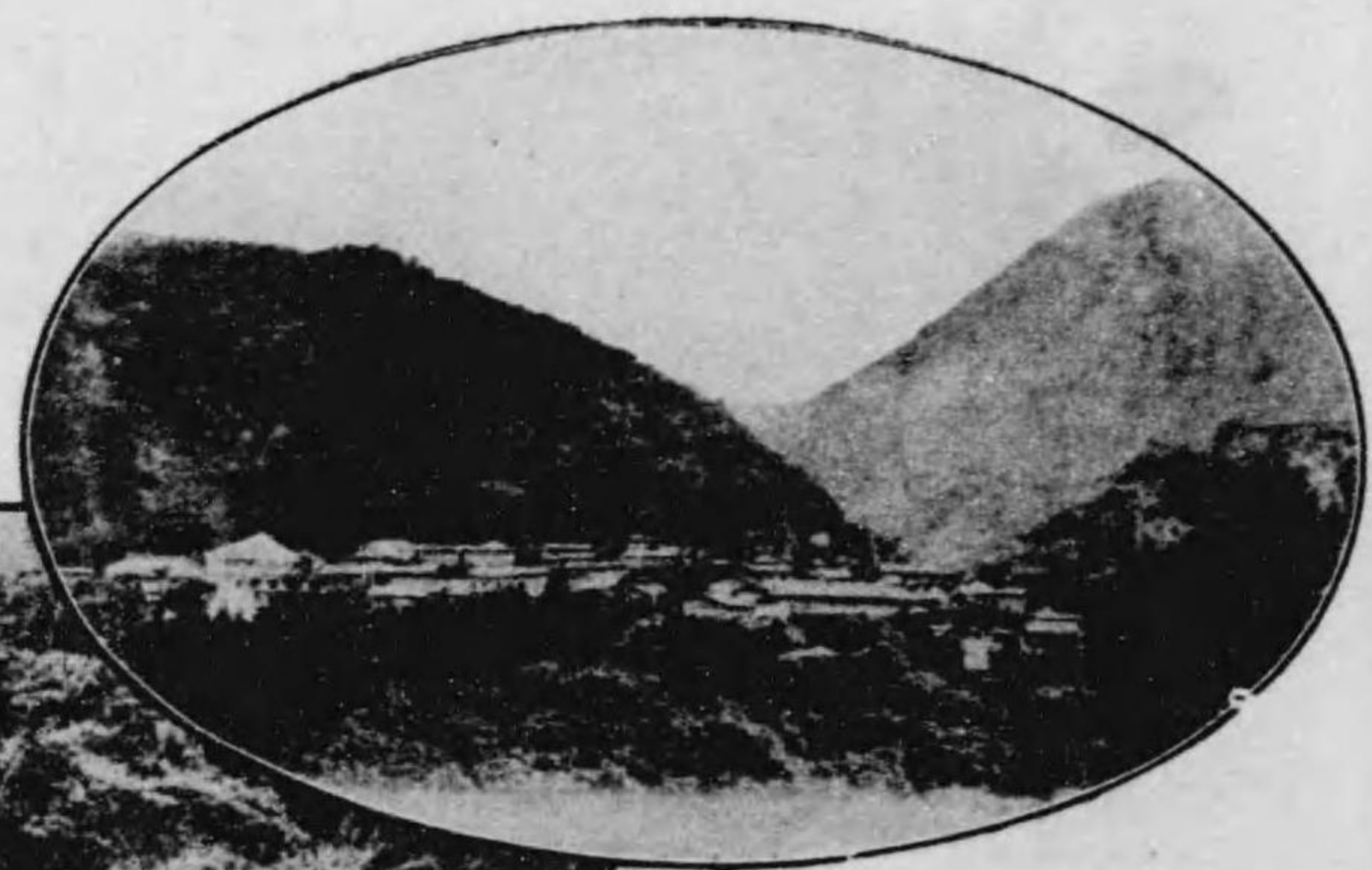
石坂惠十郎

電話 一 番

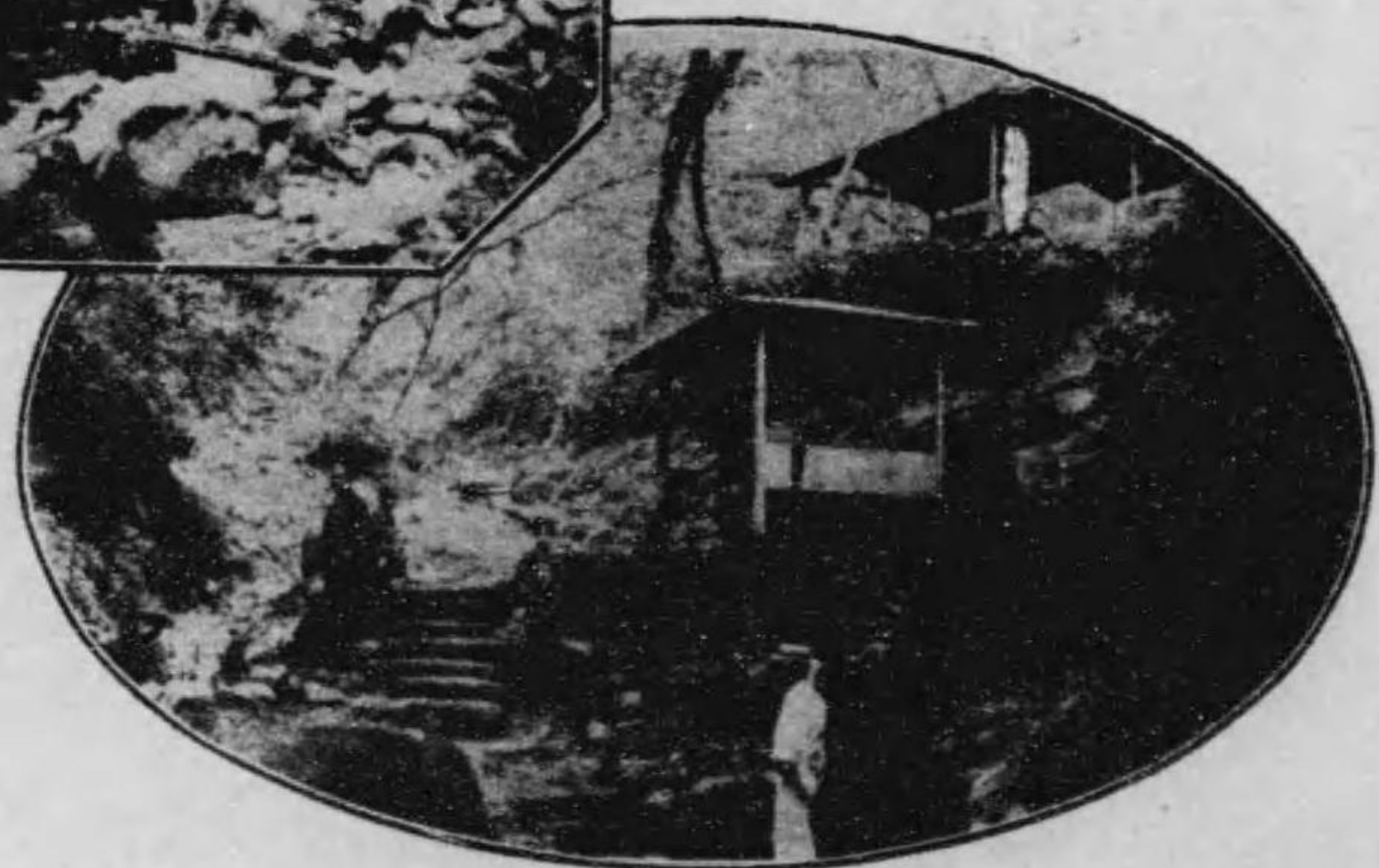
眺望絕佳  
待遇懇切



伊香保温泉全景



辨天滝

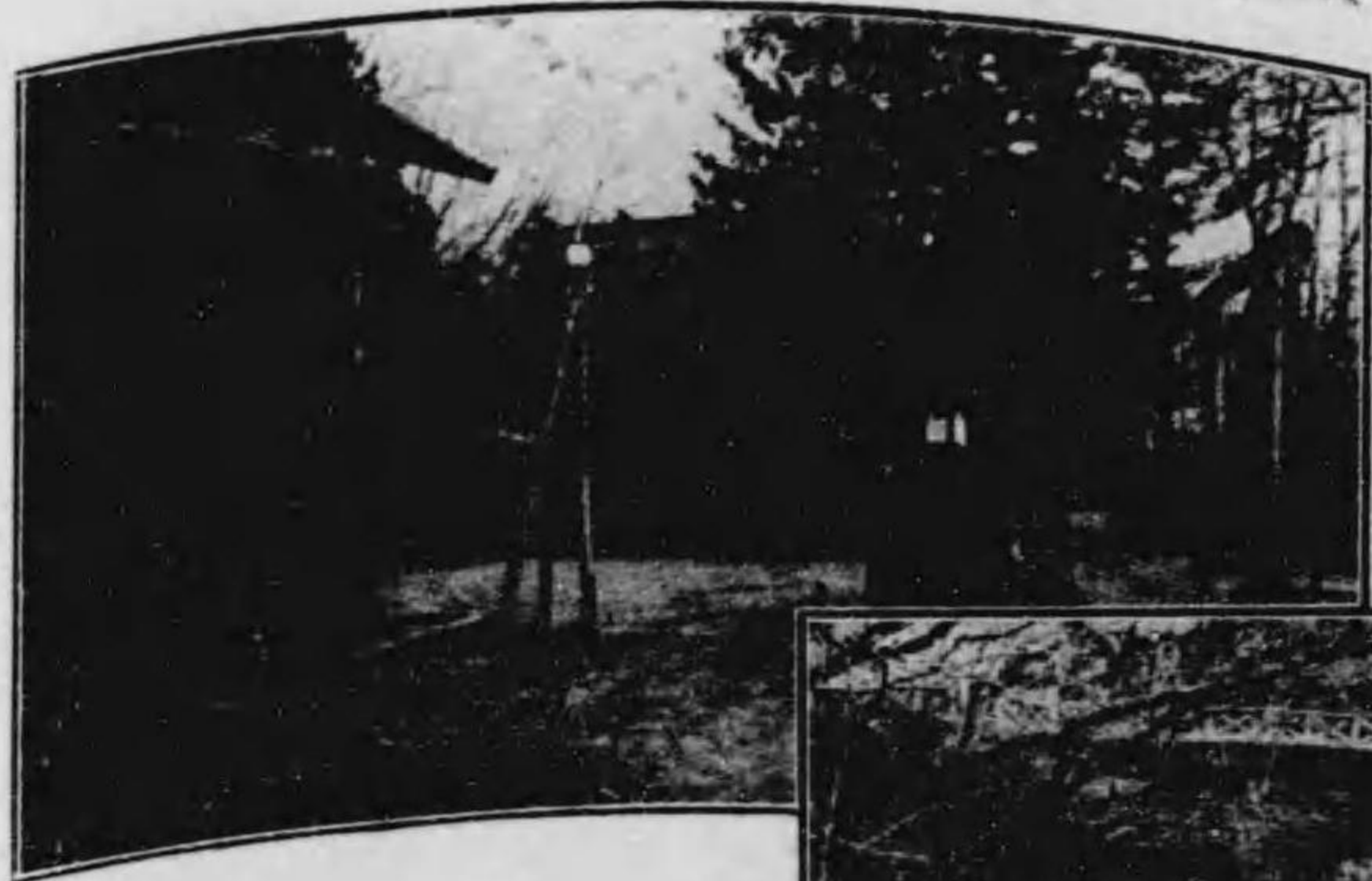


伊香保温泉元湯





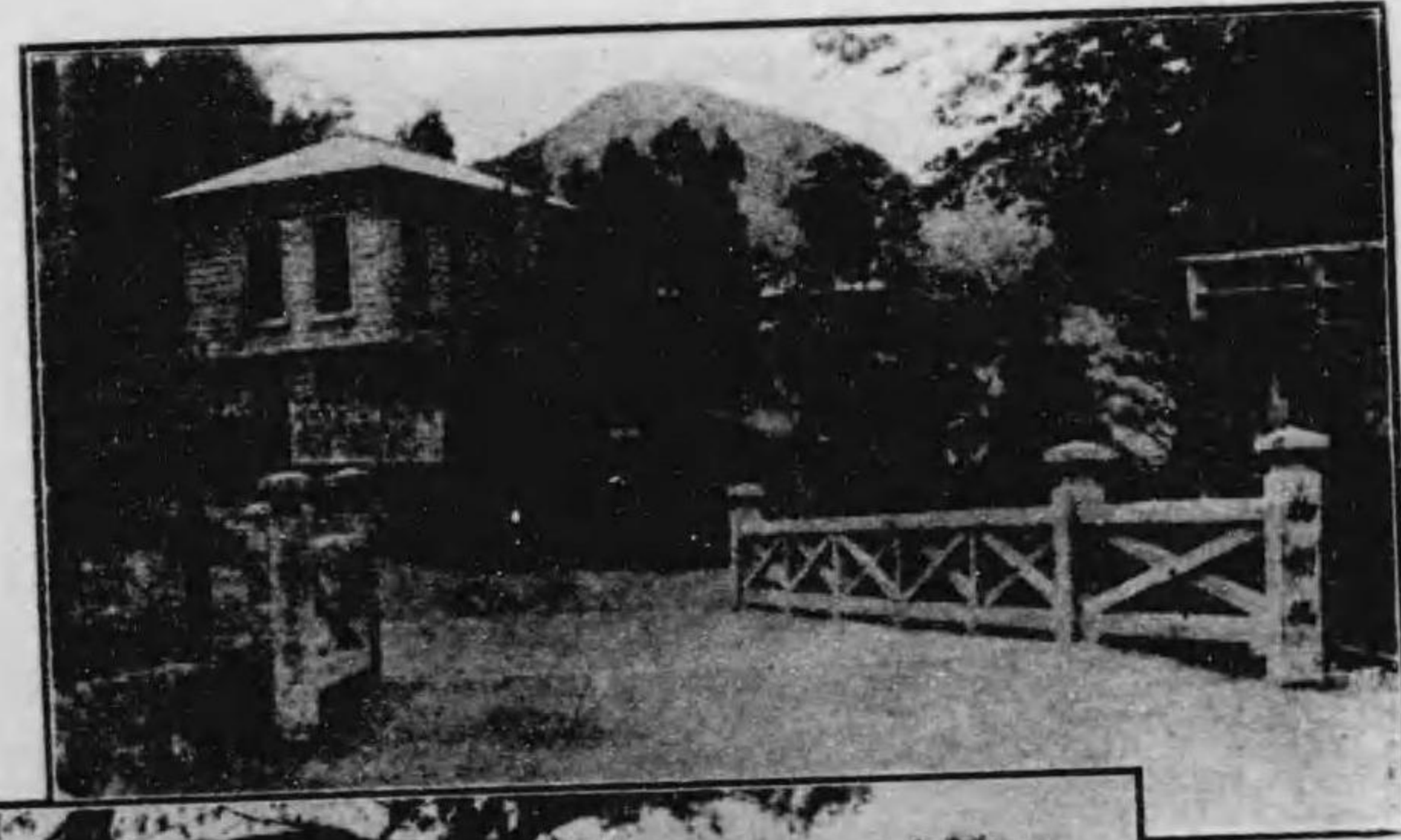
伊 香 保 神 社



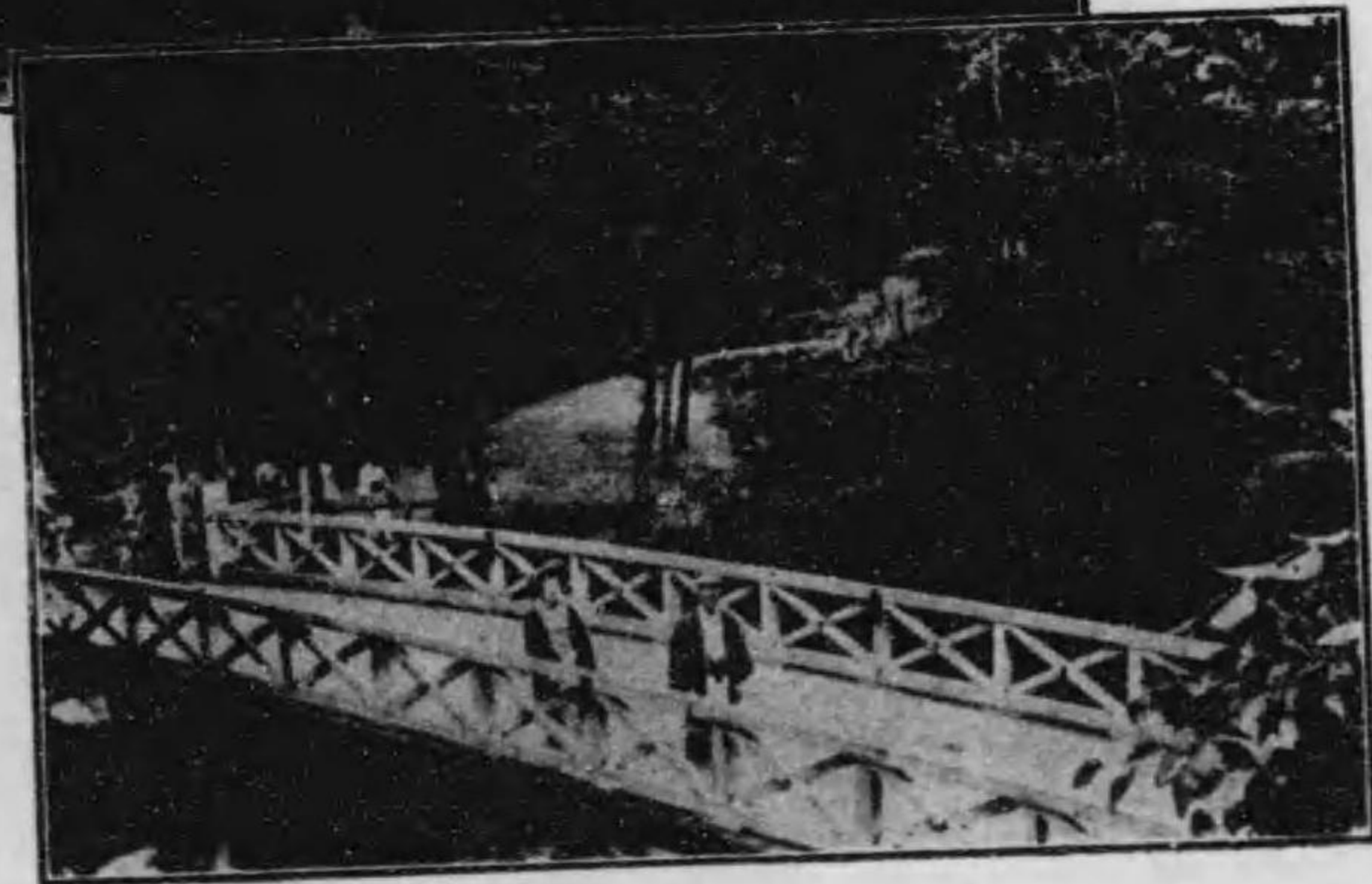
湯 元 道 入 口

黃 金 瀧

物 開 橋



二 ッ 岳



湯 元 伊 保 崎 橋



社 神 名 椋



ス  
ル  
ス  
岩



橋 神 隨

瀧 大 保 香 伊



七  
重  
瀧

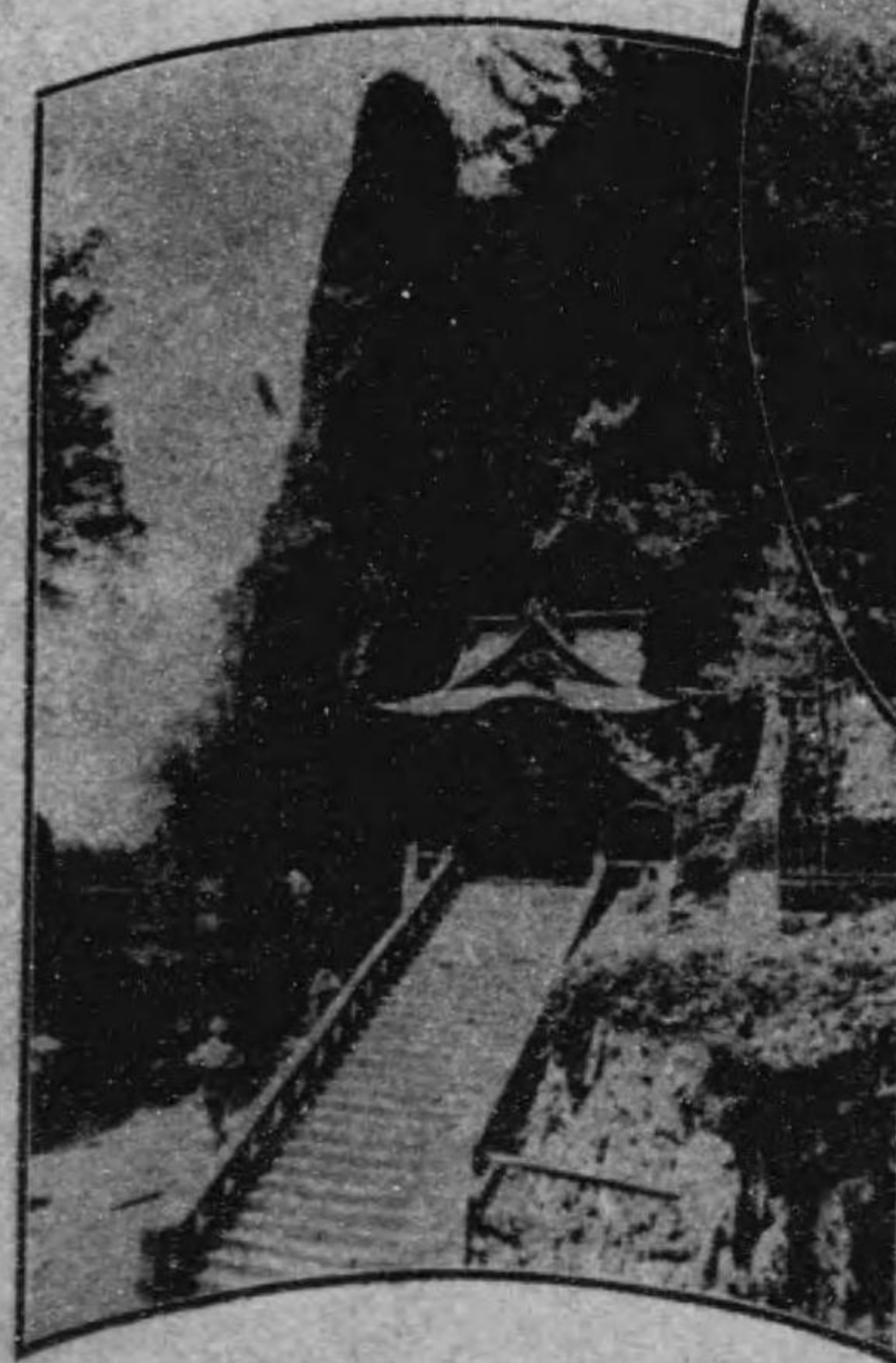


音 觀 澤 水





岩折九



岩燭蠟及社神名棟

はしがき

余は常に思らく、温泉は是れ一の天恵にして、吾人の心身を養ふべき處なるを。然るに之れを悪用して遊興地化せしめ、温泉場と云へば直ちに姪猥を意味し聯想せしむるに到れり年々滅びに趣く處勢からず嘆すべきことどもなり。

伊香保の人士茲に見る處あり諸般の設備の改善と共に精神的方面の向上を企り、理想の保養地として、天恵を善用せり其効果空からず、今や浴延人員實に三十萬を超ゆ亦盛ならずや。

而して伊香保に關する既刊の書亦尠からず、必れども或は繁に過ぎ簡に失し、所謂現代的なる、値廉にして要を得たるものなし、余は本年此の地に遊ぶこと前後三回親しく實況を査察して、之れを記述す、元より



一冊子僅かに要を録せしのみなりと雖も伊香保に遊ぶ人士の爲め些なり  
とも東道の参考たるを得ば、幸甚々々。

編 者 識 之

### 伊香保案内目次

一、總説及地理	一頁
一、氣 候	三頁
一、歴 史	四頁
一、交 通	七頁
一、泉質及効能	九頁
一、諸官衙公署	二二頁
一、旅 館	二三頁
一、名 産	二六頁
一、名所及古蹟	二七頁

伊香保八景、伊香保神社、湯元伊保崎橋、猿澤、屏風岩、黃金瀧上の山、湯の平、物聞山、御用邸、關屋、境澤、中子稻荷、丸山、辨天瀧、大瀧、箱島不動尊、岩井洞、地藏川原、水澤山水澤觀音堂、水澤寺、船尾の瀧、伊香保八景、伊香保



八瀧、我樂目嬉温泉、  
 一、附榛名山案内……………三五頁  
 榛名山、高根、二ツ嶽、蒸湯、榛原、相馬ヶ嶽、摺碓岩、伊  
 香保富士、榛名湖、天神峠、葛籠岩、榛名神社、榛名村  
 一、和歌數首……………三〇頁

目次終

案内伊香保温泉

總説及地理

伊香保は群馬縣群馬郡の西北部榛名山の中腹に位し、海拔實に、貳千有八十尺、土地高燥空氣清澄にして靈泉亦た豊富なり。

抑も吾國は温泉多し、然れども深山幽谷に潜在し交通不便のみならず甚だ蔭鬱なる處のみ多し、獨り此の地は秀麗なる靈山を背景として、招呼の間に展開したる快濶なる風光は、何等の雜趣、何等の天恵ぞや、此の仙境にして此の靈泉あり、而して諸般の設備も亦た完備して間然する處なし、實に吾國の代表温泉場として、内外人の嘆賞して措ざるも豈偶然にあらざるなり。





來浴者一ケ年約三萬五千之れを延人員とせば凡そ三十萬を下らず又偉ならずや。是れ温泉の効用顯著なるに因ると雖も、自然の山水は如何に來浴者を樂ましむべく、造化の妙手を揮ひたるかを窺ふべし殊に交通の關係は帝都上野驛より汽笛一聲纒かに半日を費さずして、忽ち浴槽の人となり得べく、又た此の勝地到る處に、古刹舊趾の散在するあり、浴餘の散策をして一層意味あらしめん。

近來此の地の人士は單に外形上の設備を改善するに止まらず。相互に相誡め此天與の恩恵を、倍々善用せんことに勵み、精神的に客を待遇し、療養地として清遊地として些かの遺憾なき様努力するは、是れ今日の盛況を見る一大原因にあらずんばあらず。

地質は一帶の火山岩より、成り加ふるに地勢の傾斜急なるにより排水頗る速に雨水は直ちに地に滲透するを以て一般温泉場の濕氣に多きにも拘、當地は、

常に乾燥して泥濘渌溜の跡を留めず、故に盛夏の候と雖も蚊蠅の類を生ぜず。従て昔より曾て蚊帳を用へし事なく、且つ傳染病の流行せし事なし、是れ亦此地の一大特色と云ふべし。

氣 候

故ベルツ博士其著日宗論に曰く、伊香保の氣候及土質は實に絶類である、日本全國中恐らくは、此地と清勝佳景を競ふ所はあるまい、故に温泉は無いとしても、其眺望の絶妙と其空氣の爽快とは來遊の客をして常に絶つまい」と宜なり宜なり、伊香保は海拔實に二千八百尺の高燥の土地なるを以て空氣清透なる、酷暑華氏八十五度を超へず、嚴冬の候と雖も温泉の爲め、寒威甚だ激烈ならず、背後の山岳と周圍の森林とは常に、氣候の激變を遮りて調和を保つ、故に伊香保は單り温泉療養の効用あるのみならず。此の地に滞在、



日を久ふせは、全然に氣候療養等の効果も亦た顯大なるものあり、殊に眺望絶佳、心身自ら爽快を感じるに於ておや。

伊香保の歴史

記録の示す處に據れば今を去る貳百四十餘年前(寛文年間)より明治十一年まで、既に九回祝融氏の崇るところとなり、其都度書類器物概ね焼失せしを以て、湧出の起原は勿論發見に關しては考證と爲すべきもの、一もあるなし、唯口碑の傳ふる所に據れば、人皇十一代垂仁天皇の御代既に温泉湧出し居りたること疑なし、されとも、二千年以前の出來事にして、其真相を詳かに知るに由なし。

乍併萬葉集古今集等にも、伊香保、伊香保沼などの字句の散見するも、之とて、其起源を瞭かにするに足らず、後世に到り、即ち文明十八年(略四百

餘年前) 覺惠法師が此地に來たり温泉に浴せし事を北國紀行に見ゆ、又文龜二年(四百年前)連歌師宗祇宗近も其『宗祇終焉記』に此地に入浴せることを識せり。此等に由りて考れば四五百年前に温泉場の跡を成して衆庶の入浴せしは事實なり。されど舊記に、『千百餘年前より僅か計りなる村民湯元の邊りに住みしが、後天正四年(今より三百餘年前)武田侯より地を賜はり現今の地に移り温泉の業を營む云々』とあるより推せば、其時代は今の湯元なる地に村民が形ばかりの浴舎を設けあるのみにて、實に佗じきものなりならん。後天正年間に到り現今の地に移りて、此の方三百有餘年間幾多の變遷を経て漸次世の推移と共に發達し。今日の繁榮を見るに到りたるものなり。

領土管轄は往古は暫く之を措き、醍醐天皇延喜年間より後小松天皇慶永年間に到る凡五百餘年間は伊香保神社の神領たりしが、永享年間足利氏の世に上杉憲實當國の守護職となるや、その臣長尾清景を白井城に入らしめ以て守



護代理となさしむ、故に長尾氏の領屬となり、爾後天文年間に至る、同氏七世の間、之に隸せり。元龜年間武田氏の侵略する處となり、其臣内藤昌豊の支配となり。天正十年武田氏亡ぶるや、織田信長の臣瀧川一益、厩橋の城主となるに及びて其管轄する處となり。更に小田原の北條氏に屬し、同十八年八月より、箕輪城主井伊直政の領分となる。次て正保三年德川氏の直領となりて、當國岩鼻代官所の支配する處となり明治維新に至る。

大屋 伊香保に舊より居住せるもの十四戸あり、之れを大屋と稱す、天正年間より明治の初年まで、累世祖業を襲き温泉土地の所有主なりき。この大屋の先祖は概ね長尾氏の遺臣にして、天正年間關ヶ原の戰に参加して、功あり後ち郷士となる、德川氏の初年三國街道裏道の關守を爲す、(今の關屋は)苗字帶刀を許され村内の年寄と稱し關所守護番に當れるものを名主と云へり、十二軒を十二支に擬し、その該當せる年を本番として關所の勤務に任せり、

湯女 德川氏の初め頃全國の温泉に客を迎ふる爲め若き婦女を湯女と稱して、許されたりしかば、至る處温泉場の殷賑を極めし事歴史に見ゆ、當温泉場にても、元祿寛保の時代は最も盛んにして、後ち種々なる變遷ありしも幕末の頃まで、給仕女飯盛女などの名目にて客を遇せしもの、如し、後ち公稱の娼妓となり、明治五年解放金を據して解散し、更に九年貸座敷を許され娼業者十七軒娼妓二十人あり、一時盛況なりしも十六年度娼の達示により今日ハ風俗頗る改善せらる。

萬葉集

伊香保風吹く日吹かぬ日ありといへど

我戀やみし時なかりけり

交

通

東京上野驛より

高崎驛まで六十三哩

汽車にて三時間三十分



前橋驛まで六十九哩

汽車にて三時間四十分

高崎驛より

伊香保まで二十哩

高崎水力二時間十五分

前橋驛より

伊香保まで十六哩

利根水力一時間五十分

注意 上野驛にて伊香保まで連絡切符を發賣す、高崎下車も前橋迂回

も同一にて故に手荷物伊香保にて受取至便なり。

賃金は普通三等一圓六十錢、二等二圓三十五錢一等三圓三十五錢

尤も東北小山方面よりは前橋驛、信越地方よりは高崎驛に下車して前記の

電車に據を以て至便とす。

各地里程表を示せば左の如し。

日光	三十六里	善光寺	三十六里	草津温泉	十三里
四萬温泉	九里	澤渡温泉	七里	川原温泉場	七里
磯部温泉	七里	赤城山	七里	妙義山	九里

輕井澤 十二里 東京 三十五里 宇津宮 廿八里  
 小山 十五里 前橋 六里 高崎 七里  
 伊香保温泉はラジウムを多量に含有して居ることは専門家が全国各地の温泉に就いて調査中であつたが明治四十三年伊香保に於いて始めてこれが發見された故に當温泉の特効ある事は愈々全國無比なりとの稱は確かな事實となつて來た

### 泉質及効用

伊香保温泉の主成分は、内務省衛生試験所の定量分析に依れば、鹽類性含鐵炭酸泉(銅鐵泉)に屬し温度は平均攝氏四十五度(華氏百十三度)を示し反應は弱酸性なり、其毎千分中に含有する、固形物總量は、九五八六なり、而して其各成分は左の如し(明治三十七年四月十四日官報六二三號所載)



硫酸カリウム	〇、〇二二〇一
硫酸ナトリウム(芒硝)	〇、一〇〇六七
硫酸カルシウム	〇、二七六八六
クヨールナトリウム(食鹽)	〇、〇四六八〇
クロルマグネシウム	〇、一〇三五五
炭酸ナトリウム	〇、〇八七九三
炭酸カリシウム(石膏)	〇、一一〇一六
炭酸マグネシウム	〇、〇〇三〇五
炭酸	〇、〇一五八一
炭酸亞酸化マンガン	〇、〇〇三五六
酸化アルミニウム	〇、〇〇三五六
珪酸	〇、一五九三〇

磷酸	痕	跡
硼酸	痕	跡
ヨロド	痕	跡
ブローム	痕	跡
有機物	痕	跡

〇、七七九八

遊離炭酸の立方「センチメートル」三五一、〇  
 右定量分析の結果に依れば本鑛泉は鑛泉分類上塩類銅鐵泉に屬す。  
 醫治効用を示せば左の如し、

- 貧血諸病
  - 萎黃病
  - 腺病
  - 慢性癱瘓質私
  - 慢性生殖器諸病
  - 痛風
  - 脂肪過多症
  - 慢性消化器病
  - 神經諸病
  - 慢性皮膚病
  - 重病後
  - 慢性皮膚病
  - 重病後
- 又は身體精神過勞後の衰弱。



禁忌症……熱性諸病、肝、腎及肺の機能的疾患殊に咯血を伴ふ肺結核  
高度の充血、

附記醫學博士「ベルツ」氏の日本鑛泉論に曰く「凡そ伊香保の温泉を療養  
に用ひて最も効あるものは、子宮病、及び胃病なり……また筋肉痠麻質斯  
及び關節痠麻質斯にも効あり、其他皮膚感能不順なる患者に於て良効あり  
……」云々。

而して近來醫學界にて、温泉の効用は單に泉質のみにあらず、ラシユーム及  
エマナチオンの放射作用に依るものある事を斷定せられ、伊香保温泉にも四  
十三年の實驗によりて、其効用の的確なる事を證せらるゝに到れり。

諸官衙公署

伊香保温泉取締所 同所は町の殆んど中央にありて、伊香保の改善、發展に

關する事項は大小となく、研究せらるゝと共に、常に風紀の取締、商賣、旅館  
物價、の規律衛生上の注意、風致の保存、道路の改修等に至るまで行届き居  
るは他の模範とする足れり。

浴醫局 同局は常に温泉の研究なしつゝあるとは勿論一般入浴客の需めに應  
じ體格の検査をなし、體質に適應したる、入浴方法を指示し又滞在中の經過  
成績を報告をなす等旅客の便宜を與ふると共に一般治療の需めに應じつゝあ  
り、警察官駐在所、町の中央にあり、郵便電話電信局、町の尤も便宜の場所  
にあり、町役場、小學校水力電氣發電所等あり。

温泉旅館

伊香保の温泉旅館は一言以て是れを敝へば眞に理想的なり、地形の傾斜を利  
用して三層四層の大建築物は、流石に天下の名湯として、誇るに足るの美觀



を呈し何れの客室よりも、眺望を恣にするを得べく、各内湯の設備は云ふも更なり、電燈、電話は勿論寢具食器に到るまで、尤も文明的の施設を試みざるものなく、殊に親切と勉強とは此の地の追年隆昌に趨くは唯一の商策なり滞在費は旅籠料と室貸との二種あるを以て客の好みに任す。室貸とは之れ養療を目的とする客の爲め一室を貸切りとし女中をして庖厨の用を便せしめ、恰も我家に起臥すと同様に大に費用を節約し得るを以てなり。滞在費の主要を示せば概ね左の如し。

等級	種別	座敷料 (自炊用 器共)	夜具料 (一 夜 組)	普通旅籠料	晝 食
壹等		五圓以上	貳拾五錢以上	壹圓五拾錢以上 貳圓 迄	宿料の半額
二等		三圓以上 五圓 迄	十五錢以上 廿五錢 迄	八圓以上 一圓五十錢 迄	同

座敷料は一週間の價にして般賑期(七、八、九月)以外は最も低廉なり。以上の外自炊客よりは浴銭電燈料等を申受くる規定あり。此の地の温泉旅館名家號は左の通りなり。

三等	三圓以上	一圓以上	八圓以上	十五錢以上	六十錢以上	八十錢以上	同
----	------	------	------	-------	-------	-------	---

- |            |            |           |
|------------|------------|-----------|
| 鑛榮館 石坂惠十郎  | 仁泉亭 千明三右衛門 | 横手館 横手信太郎 |
| 香雲館 塚越七平   | 香山樓 村松秀茂   | 福一樓 福田與重  |
| 子ノ木 暮木暮武太夫 | 蓬萊館 木暮喜和   | 千登世館 有澤眞寅 |
| 浴閣樓 岸權三郎   | 森田屋 森田秋三郎  | 丸木屋 萩原龜太郎 |
| 松葉屋 萩原重朔   | 藤の屋 齋藤億助   | 松島屋 新里ソメ  |
| 新井館 一倉安太郎  | 河内屋 羽鳥善吉   | 吉田屋 金井忠作  |



橘屋 馬場友七	油屋 庭山岩吉	梅屋 梅村辨次郎
叶屋 大塚政五郎	金田屋 金田辰造	大澤尾 福岡啓一郎
龜屋 金井市太郎	中澤屋 中澤ミノ	柏屋 茂木左右門
山城屋 眞淵熊藏	福田屋 福田芳太郎	齋田屋 齋藤谷藏
木村屋 木村利平	外八名省く	

名 産
--------

伊香保の名産と數ふべきものは左の通りにして即ち湯花、此の湯の花の含有成分は温泉のそれと略同一なり。故に、東京市中を始め各都市に『所謂伊香保温泉』てふ湯屋の流行する所以にて亦た自己の風呂に混和しても効用あり。

# 欠



# 欠

## 附名山案内

榛名山 火山研究者の尤も愛玩する山岳にして標式的二重式消火山なり中央火口丘として榛名富士を有し、火口原湖として、榛名湖、火口瀬として沼尾川、外輪山として烏帽子、鬘櫛、硯石、掃部ヶ嶽、氷室山、摺碓岩等あり而して最高所榛名富士は標高、實に四千八百八尺を示す、その風光の絶佳なるは巖石の奇、湖水の美、祠堂の輪奐、と共に天下に有名なるものなり、是れより、榛名方面の風物を記さん

高根 伊香保町の西南に形圓く峙ち、山巔樹木なき處を云ふ（八景の

一）

さしのぼる高根の月を待霄は

まつさやかなるさをしかの聲

博房



二ツ嶽 湯元の西南にあり、雙峯雲を突き、高きを男嶽低きを、女嶽と云ふ、往古の噴火口は頂上に大穴を残して痕跡を留む満山悉く噴石にして、奇態なる巖石隨所に存在す、麓の平原は秋草の美鞠すべし。

蒸湯 女嶽の東麓にあり、泉は硫化水素瓦斯を含み、皮膚病、痔に効あり

此の地伊香保より高き事千二百尺海拔三千三百尺盛夏尙嶺陰に氷を認む。

榛原 伊香保平とも云ふ、伊香保より榛名神社の途中の高原にして、平垣

恰も砥の如く四顧の眺め最妙なり。獅子岩、摺碓岩、八ツ塚、富士見坂、座

主の池等の勝地は里餘の道程のうちに散點す、亦た四季の草花麗かにして、

畫趣實に愛すべし。

伊香保その祖の榛原戀に

奥を勿かねそ、眼前し宜かは (萬葉集)

相馬ヶ嶽 往昔相馬小次郎師常か山頂に遠見の番所を置きしより此の名

ありと云ふ、黒髮山、阿蘇山とも云ふ、頂上に平將門の石像あり、相馬明神と稱す。攀登頗る困難なるは僅かに鐵鎖に據りて人を導くを、見ても知るべく然れども一度山巔に立ては雄大なる眺望は、何人も快哉を叫はざるなし摺碓巖 榛原の南方にあり、嶄々乎として最大なる巖洞常に春を搗くが如き響あり故に此名ありと云ふ中央に大孔あり攀ちて孔口より展望せば、上武の平原一眸に集り、壯觀云ふべからず。

伊香保富士 一名榛名富士、駿河の富士に極似す故に此の名あり、麓に一畚山と云ふ饅頭形の小山あり。

榛名湖 一名伊香保湖と稱し榛名の神の御手洗と傳ふ、是れ舊噴火坑にして、東西十一町、南北十七町、周圍三十五町湖心浩溶として一碧を爲し、四圍の山巒、倒影水に落ち漣澗靜かに、脈絡たる山岳は一畚山烏帽山、鬢櫛山硯嶽掃部嶽等の名あり其山容水態悉く畫を展ぶるが如し榛名湖は亦た杜



若、螢の名所なると共に數艘の舟は釣魚の客を迎ひつゝあり、湖畔茶亭あり  
湖畔亭と云ふ、沼の潑瀾たる鮮魚を調理す、芳醇一瓶。更に興深かるべし。

天神嶺峠 榛名神社に到る通路に當る小嶺にして、頂上に榛名神社の大華  
表あり、兩側に茶亭あり富士見亭榭水亭と云ふ、此の處湖水及び富岳を望み  
得るを以て名附く、名物の新子を賣る。

葛籠岩 峠より十町餘谷川を隔て、奇岩あり是れを葛籠岩と云ふ、高三十  
丈、榛名山中奇岩多し而して此岩を以て、第一とす。

榛名神社 天神峠より下る事十八町、祭神は『元湯彦命』(彦田支命)と  
なす然し神名古書に其名見ざれば、恐らく『少彦名の命』の別名ならんか、  
創建の時代詳ならず、今は縣社なり。

社は、榛名山の中腹にして東南に面す、石磴曲折して高く中段に雙龍門あ  
り、其傍に突几たる一巨巖の天の逆鋒に似たるあり、劍鋒巖といふ、斯地

には奇巖怪石兀々として頗る神秘的なり、老杉亦た蒼森として幽邃云んかた  
なし、本社の後には御姿岩あり、頂上御幣を奉る、本社拜殿は彫鏤の妙を盡し  
額堂神樂堂に到るまで彫刻の精緻は、嘆賞の外なし、額堂の前に古色蒼然た  
る異様の鐵燈籠一基あり、元享二年二月十八日左近衛中將新田義貞公奉納  
とあり、石段を下りて、御神水の前に茶屋二軒あり其邊に神橋(朱塗)袖摺岩  
三重の塔あり塔の左側に老杉の轟々たる「千本杉」と稱す  
また御襖橋、隨神門、龍神橋、を越ゆれば、兩側に石燈籠あり、青銅の大鳥  
居ありて、榛名村に入る。

榛名村 往昔は山内三千百坊ありて殷賑を極めたる時代ありしも、今は寂  
れて戸數二百戸の山里に過ぎず、この地より高崎市まで六里にして達す。

伊香保に關する詩歌恐らくは數千を以て數ふべし茲には僅かに二三を錄せ  
ん。



(萬葉集)

伊加保ろに雨雲に續きかぬまつく

人そおたほふいさ寝しめ兒等

かみつけの伊香保の嶺ろの出湯こそ

神のさつけし藥なりけれ

春夏のけしめややかに伊香保山

鶯もなきほととぎす鳴く

出るにもさはらさりけり打なひく

雲より上の山の端の月

(夫木集)

いかほなる物聞山のほととぎす

にこらぬことにきこゆなるかな

(萬葉集)

子持山若蛙手の紅葉つまで

寝もと我は思ふ汝は何とか思ふ

磐樹

正兄

資之

伊勢

免惠

(同)

上野ぬ安蘇山葛野を廣み

延ひしものを何か絶わせぬ。

誰か袖の秋の別れの櫛のはの

黒髪山を間なくしくるる

(同)

かみつけぬ、伊香保の沼に植小水葱

かく戀ひんとや種もとめけん

(拾遺集)

いかほのやいかほの沼のいかにして

戀しき人を今一目見ん







上野伊香保間汽車電車改正時間表

汽	上野發	高崎着	高崎發	澁川着發	伊香保着
午前	五、〇〇	午前	六、二五	午前	八、四五
	六、三〇		八、二五		一〇、四五
	七、四〇		九、〇五		一一、二五
	八、三五		一〇、四五		一二、〇五
	九、四〇		一一、五〇		一、〇〇
	一一、一五		一二、三〇		二、一〇
午後	一二、一五	午後	一、一〇	午後	三、三〇
	二、〇〇		二、三〇		四、五〇
	四、二〇		三、五五		六、一五
	五、四五		五、一五		七、四〇
	八、〇〇		七、四〇		九、〇〇
	〇		九、一五		一一、〇〇
	〇		一一、三五		一二、五〇
	〇		一二、三五		一、四〇
	〇		一、三五		二、五〇

○印ハ七八九ノ三ヶ月連轉シ其他ハ不定期便  
 ◎印ハ不定期便

電	伊香保發	澁川着發	高崎着	高崎發	上野着
午前	六、三〇	午前	七、二五	午前	八、四五
	八、一〇		九、〇五		一〇、二五
	九、五〇		一一、〇五		一二、二五
	一一、五五		一二、五〇		一、三〇
午後	一、三五	午後	二、五〇	午後	三、五五
	二、三五		三、三〇		四、五五
	三、四〇		四、三五		五、五五
	五、〇五		五、五五		六、五五
	五、二五		七、二〇		七、三五
	〇		七、四〇		八、〇五
	〇		〇		八、三五
	〇		〇		九、〇〇
	〇		〇		九、一五
	〇		〇		一〇、〇〇
	〇		〇		一〇、二五
	〇		〇		一一、〇〇
	〇		〇		一一、二五
	〇		〇		一二、〇〇
	〇		〇		一二、二五



大正六年八月三日印刷  
大正六年八月拾二日發行

伊香保案內奧附

定價金拾五錢

編輯者  
東京市神田區美土代町二丁目一番地  
筒井九郎右衛門

發行者  
東京市深川區西町一番地  
勝本濱吉

發行所  
東京市神田區美土代町二丁目一番地  
筒井九三

印刷者  
東京市神田區美土代町二丁目一番地  
筒井盛華堂

不許  
複製



339  
1000



終

